



# 国際情報

INTERNATIONAL & INFORMATION

新潟国際情報大学広報 第1号

〒950-22 新潟市坂田字カタハタ46番地1 tel 025-239-3111 fax 025-239-3690 E-mail somu@nuis.ac.jp ホームページ <http://www.nuis.ac.jp>

## 「知る」とどういふことについて

学長 内山 秀夫



羽仁五郎という歴史学者―映画監督の羽仁進さんの父上です―が、昭和十二年六月二十五日づけで岩波書店から『白石・論吉』という本をだしました。当時の大日本帝国は、昭和八年には国際連盟を脱退して世界の孤児になつていましたし、そのひとりよがりを国内に向けて国民に緊張を強制するために、思想統制に血道をあげておりました。

東京商大(現 橋大学)大塚金之助助教授や河上肇の検挙、作家小林多喜二の拷問虐殺、京都大学の滝川事件、全国小学校教員精神作興大会、文部省思想局の設置、陸軍省『国防の本義とその強化の提唱』の頒布、美濃部達吉教授の天皇機関説事件、第二次第二次国体明徴についての政府声明、思想犯保護観察法公布、文部省『国体の本義』の発刊。

このように見てくれば、羽仁がこの時代思潮の中で「千百年来、未だかつて真実に反省されることのなかった日本の封建主義に反省を求め、まだ正面から批判を許されなかったその歴史的真相を白日の下にさらし、久しかったその抑圧から、わが日本の人民と、学問思想及び教育を、ついに自ら解放し

自立させる使命を担うに至った必然性の中に、人間としての、また思想家としての、福沢諭吉の近代的真実があった。」と書くことが、いかに勇気ある作業であつたか分かるにちがいありません。だが、この文章は二ページと五行だけの、いわば序文の最後の部分であつて、残り一九二ページはほとんど福沢の文章を接続詞でつないだ「作文」なのです。それについて、福沢の批判精神のありようを實に見事に浮きあがらせている。私が最初にこれを読んだのがいつだったか憶えていないのですが、最近、新潟の古書店で見つけて読み直してみても、私はすっかり感心しました。いえ、度肝を抜かれた、と言つても差しつかえありません。他人の文章に託して、自分をきわだたせる、そのスタイルにうたれたのです。

かつて「徒弟時代」ということばが、私たちの共通語でした。もちろん、大学生の頃です。それは羽仁さんのような大学者が福沢に対したそのことでは決してなく、自分たちが人類の先達を後継するという意味を含んでいて、そうですね、青年の客気を反映していた、といえます。その分だけ、若く青く生意気でありましたが、同時に人間・人類に対する畏敬の念もまじっていたようにも思います。そんな私たちに「無知は罪悪である」という歴史的

真実が、ががつんとうちつけられるのです。よき書と出会つて、自分の「無知」を知つて愕然としたとき、知への限りない渴望が湧き上がってきます。ソクラテスが語つたように、人はここから「知恵を愛する人」(フィロソフィア)になります。「遍歴時代」が始まるわけです。英語では「卒業」のことを、「コンメンサメント」といいます。この言葉が同時に「開始」の意味をもっていることを知っている人は多いでしょう。よき始まりのために残された「今」を頑張つて下さい。





## 豊かな情報文化で

## 未来を切り拓こう



情報文化学部の  
目指すところ  
学部長 浦 昭二

私達の大学は、その名が示すとおり、これからますます進む国際化と情報化の時代に備えた人材を育成することを目指して設立されました。いま、私達は、情報技術の進歩により、瞬時のうちに地球の裏側の出来事を知ることができ、また、交通機関の発達により国境を越えて移動することも容易になっています。こうした技術進歩に伴う環境変化は、人間活動に根本的な変革を要求し、新しい類型の人材を求めています。それに対して、情報という視点から応えようとしているのが、この情報文化学部です。

それでは、情報とは何でしょう。データとはどんな違いがあるのでしょうか。また、知識とどんな関係があるのでしょうか。多くの人が情報の定義をしています。使う場面によってそれが適切であるかは異なります。ここでは、次のように考えます。『ひと(あるいは組織体)がデータを受け取ったとき、それを各自の持っている知識、価値観、あるいは美意識に照らして、つぎに自分のとる行動の選択に役立つか、またはその知識などに新たな要素を追加、またはなんらかの修正を加えることになったとき、そのデータは情報となります』。

次に、学部の名前になっている情報文化について考えましょう。この言葉は耳慣れないものです。ある集団で、情報を伝える、あるいは情報が交流すること、すなわちコミュニケーションが成り立つのは、その集団のなかで、何らかの文化の共有がなければなりません。その文化を情報文化ということが出

来ます。こういったも、まだすっきりしない方が多いでしょう。そもそも文化という言葉自体が捉えどころのないものです。文化とは、「社会を構成する人々によって習得・共有・伝達される行動様式ないし生活様式の総体」であります(大辞林)。情報文化は人間の情報行動についての文化です。それは、人間が集団として活動する単位にあるといえます。居住する地域、働く職場、仕事や趣味とともにする仲間、それぞれに情報文化はあるわけで、幾層にも重なって存在します。

人間の活動が狭い範囲に限られていたときには、情報文化は自然発生的にでき上がってきたので、ひとびとの意識にはあまりのほりませんでした。しかし、人間活動とともに情報文化は絶えず変化しています。最近のマルチメディア技術やインターネットの進歩普及はその変化を加速しました。そして、国際化を二層押し進めています。これらの動きは人類の幸福につながるものばかりではなく、新たな紛争の火種ともなり、伝統文化の破壊をもたらすものとなりかねません。私達は固有の伝統的な情報文化を尊重しながらも、より上位の概念としての、世界に通用する国際的な情報文化を考える必要があります。

私達は、このような情報文化の観点から、これからの世の中に備えた人材を育成しようとしています。『ことは』に習熟し、地域文化の理解の上に、国際的な活動のできる人材の育成を狙ったのが情報文化学部です。一方、情報技術に習熟し、『ひと』に馴染む情報活用(の仕組みをデザインすること)のできる人材を育成しようとしているのが情報システム学科です。

いまや、国際化・情報化の大きな流れに逆らうことはできません。私たちは、情報文化を軸に、これから二学科を両輪にして、これからの社会の先導たらんとしています。情報という視点から世の中を見据えることによって、自分の生き方、これからの社会の在り方が開かれてくるものと信じています。



## 国際地域論

情報文化学科 教授 原口 武彦

情報文化学科の学生は、第1年次後期から二つの地域を自ら選択し、その地域の言語(ロシア語、中国語、ロシア語、英語、歴史、文化など)について、ゆるゆる地域研究を開始することになる。その選択に際して、この参考になることを期待されているのが、「国際地域論」である。

といつても、そもそも地域研究とは、さまざまな文化的背景をもつ二人の人間が、異文化つを選擇して研究することである。それを通じてすでに確立され普遍的な世界認識の方法によつてはまぬがれてしまふ現実を発見することを目指しているのである。つから、どのような人間がどのような異文化を扱うにも適用可能な画一的な方法があるはずがない。

学生のみなさんに参考にしてもらえるものがあるとする。結局のところみなさんの前に立っている現物の私そのものであろうと考えている。第二次世界大戦中に初等教育をうけ、戦後民主主義の中で成人し、今や経済大国といわれる国で生活する日本人が、研究の対象として選択したアフリカの現実に接して、何を発見しそれをどう感じ考えてきたのか、それを語る私をまるごと観察して参考にしてもらいたい。

地域研究とは、自分にとつての異文化を生きた人びとの眼差しを感じとり、複眼的に世界をとらえることではないだろうか。

## 「コンピュータシステム

情報システム学科 教授 永井 武

「コンピュータシステムは巨大な怪物である」ということを学んで欲しい。

本学の学生諸君はマックパソコンを通じて本学の中規模の「コンピュータシステムを経験しているが、ここで経験できることは、怪物のほんの一部である。世の中には巨大なコンピュータシステムがいくつが存在し、大部分は別々の世界で仕事をしている。CRS(Computer Reservation System)・ウォールマートの流通システム、CAS(Cheical Abstract System)など日本でも知られている世界の巨大システムがいくつもある。日本で最大のものは、郵便貯金第三次オンラインシステムであるといわれ、学生諸君の中にも利用している人がいるであろう。そのほかにも日本には全銀システム、エミの窓口、製鉄・自動車などメーカーのシステムがあり、それぞれ独立のネットワークとフロントルで情報のやりとりをして仕事を効率的に進めている。

しかし、これからは前述のような独立のしかも巨大なコンピュータシステムを時間やお金をかけて構築する必要はないであろう。より安く、早く構築でき、しかも使いやすいオープンな「コンピュータシステム、すなわち、インターネットに接続できる「コンピュータシステムが実用化されているからである。この新しいコンピュータシステムはオープンな情報システムと呼ばれている。学生諸君はこの怪物とつき合って仕事をしよう定められている。今はそのような時代である。怪物のどのような部分でもよいから仲良くつき合つてこれからの世の中を渡つて欲しいと願っている。



# わたし情報派国際人

# わたし国際派情報人

## 中国語とインターネット

情報文化学科三年 鈴木 裕生

中国語を専攻している私は、また同時に異文化理解として中国の文化などを勉強しています。他にも韓国、ロシア、アメリカなどの国々の文化をわかりやすく紹介してくれる講義があり、私はそれらの講義も選択しています。

入学したばかりのころは、中国のことは何も知らず、ましてや中国語など二言も話せなかった私ですが、日本について深い知識のある蔡先生や朱先生のおかげで、簡単な挨拶程度の会話ならできるようになりました。そして以前に比べ、中国やその他の国々の文化についての理解も少しは深まってきたと思います。

さて、語学、異文化理解を私の大学生活の第一とすると、第二としてコンピュータとの出会いがあります。今やコンピュータは、世界中のいろいろな情報が詰まっている魔法の箱です。

コンピュータを使えば、CDROMやインターネットを用いて様々の情報が素早く手に入ります。私がインターネットを初めて使ったときにはアメリカにつなげたのですが、そのとき、野球選手の野茂の活躍を書いた文書を読んで、(勿論英語で)「いま、アメリカの人が読んでいる野茂の活躍を、私も一緒に読んでいるのだ」と、感動したのを覚えています。

大学で、コンピュータなどの各種情報機器を用いて、いろいろな情報を入手していますが、それらの情報をうまく使い、多くの国々の人と上手に、コミュニケーションが取れるようにしたいと思っています。

## 英語とコンピュータと

情報システム学科三年 本多 信之

高校2年の夏、私はホームステイの為に渡米した。しかし、お世辞にも会話ができたとはいえなかった。その時私はもうとうとう英会話ができたらと思った。話は変わって、同じ頃高校でパソコンというものに初めて触れた。いろいろとプログラムを作って遊んでいるうちに、私はパソコンが趣味になってしまった。

進学するに当たって、私は英語とコンピュータを学べる大学を探してみた。そんな中、新潟の新設大学の情報を得た。それがNUSであった。文系なのにコンピュータを教えてくれる。願ってもないユースだった。棚からばた餅とはまさにこのことであろう。さらに、コンピュータだけではなく語学にも力を入れている。これが私をNUSに結び付ける決定的要因だった。というのは、専門学校はコンピュータしか学べないのに対し、大学はそれに加えて語学も学べるからである。さてそれでは、私は志望に沿った大学生活を送っているか。もちろん答えはYes。

情報に関しては、たいたいマルチメディア・クリエイション・クラブとインターネット研究会を掛け持ちしている。これらの部で、学んだ知識を駆使して、大学案内のパンフの1ページを作成したり、新潟日報のホームページ作りのお手伝いをする。ことまで、幅広くマルチメディアを満喫している。つもりである。先日、「あなたのインターネットホームページにまじした」とアラスカから電子メールが突然きた。英語に関しては現在ESで、会話を勉強をしている。

## 国際交流委員会から 海外研修旅行について

「ハッ」と思われることが、人には、たまにある。「ハッ」と思うことによって、その人はものを見方や考え方を変えることもある。本学の海外研修はそのような機会となり得る絶好のチャンスだ。多くの学生にとって、外国を訪れるというとは初めての経験かも知れない。「異文化に触れ、大きなショックを受けるだろう。昨年度実施された海外研修に参加した大勢の学生が、「実に有意義だった」と語っているのはそのことを物語っている。

今年度も一人でも多くの学生が、学生生活を考え直してみる大きな契機として海外研修に積極的に参加してもらいたい。

本学の海外研修には、一般の観光旅行では体験できない、内容豊かな大学訪問など盛り沢山のプログラムが組まれている。

アメリカ西海岸では世界の最先端をいく企業訪問もある。ロシア極東では氷結した川や海の上を歩いてみよう。中国では万里の長城はじめ多くの名所旧跡を訪れる。韓国ではホームステイを経験することもできる。

さあ、みんなで海外研修に参加して外国体験をしよう。(詳しくは学内掲示を)

## 学生部から

平成八年度新潟国際情報大学奨学生に左記の者が決定しました。二年次黒崎資多君、割田裕美(以上情報文化学科)、三年次小暮真栄子、高橋圭子、高橋毅(以上情報文化学科)、石橋みほ子、十田知美、山田雅美(以上情報システム学科)

交通事故が多発しています。平成八年度本学学生が関わった事故は九件、また、十月には教職員が続けて事故に遭い、重傷者もでした。冬期間の道路は凍結しています。運転者も歩行者も十分注意して下さい。

## 学習指導委員会から

4年次になると、必修科目として卒業研究を行います。卒業研究は、興味を持ったテーマについて教員の指導の下で深く研究するものです。情報システム学科では十月初めに指導教員が決定し、3年次ゼミと同じ教員に指導を受けることが原則の情報文化学科と足並みをそろえて、研究準備に入れるようになりました。

一年間の卒業研究を通して、特定のテーマについて資料や情報を収集する方法、資料を解読し理解する力、実地調査や実験・プログラム体験等を通して問題を分析し、自分で工夫して解決する力を習得することが期待されます。そして、これらを自分の見方で体系づけ、研究成果(論文)に纏めることが目的です。ぜひ、取り組んで見たいテーマを自分で探すよう心がけてください。

## 就職指導委員会から

就職はその人にとって一生の問題ですが、昨今の雇用情勢は依然としてきびしいと言わねばなりません。去る十一月六日に開催された本学の就職懇談会には予想外に多数の企業関係者の参加を見ました。数多くの職業の中から自分の適性能力をふまえて選択することが大切です。まず自己分析を徹底的に行って、就職指導委員に相談に来て下さい。

就職委員会は教員六名事務局職員三名で構成されています。教員は池田庄治、広瀬真三、高橋正樹(以上文化学科)、永井武、片山禎昭、榊俊作(以上システム学科)で、委員長は池田、副委員長は永井が努めています。

## 情報センター

### 卒業研究用資料の貸出しについて

利用資格 三・四年次学生  
冊数 五冊以内  
利用期間 三十日以内



## 海外研修でカルチャーショックを体験

## 謝 謝 中 国

情報文化学科三年

柳 伸一

中国では、驚きと感動の連続だった。むこうでの体験で真つ先に頭に浮かぶのは、北京大学の学生との交流会のことだ。「源氏物語」、「雪国」等の文学の話から始まり、日中の歴史、風俗・習慣、映画、音楽、スポーツ等話題は尽きることなく楽しいひとときを過ごした。彼らと話をしていると言葉の端々や態度に嫌味のない知性と教養を感じ、私達日本人学生がまだ精神的に幼い、と思うことが度々あった。会話はなるべく中国語で話すように努めたが、私の中国語がまだ未熟なために英語や筆談も用いた。その点で相手の学生には大変不快な思いをさせてしまったかもしれないと心配していたが、日本に帰ってきたときにその方から、「末永く友達でいよう」といった内容の手紙が届いてとても感激した。

天安門、故宮、頤和園、明の十三陵、万里の長城、外灘、豫園等の名所はやはり素晴らしかった。が、その美しさを文章で詳しく記すことは非常に困難であり、またそれは人に教えられる分るものではないと思う。だから知りたいと思うならば、実際に見に行つて各人で確かめてほしい。

この研修で実際に中国を訪れたことにより、大学の講義で学んでいる中国の政治・経済・文化等を更に深く理解することができた。また北京・上海の学生との交流を通じて、精神的な成長を遂げることができた。

## ロシアで知る日本

情報システム学科三年

黒崎 ゆかり

研修旅行では多くのことを学びました。ロシアは寒くて暗いという悪いイメージをもっていました。明くる大らかな人ばかり、そして美しいところでした。大学の訪問ではおおいに刺激を受けました。そして、もっと勉強しておけば良かった、これから勉強しなければと後悔の連続でした。しかし、行かなければ変われなかったと思います。それを知ることができただけで私には価値ある旅行でした。

しかも、普通のツアーでは体験できないことが体験できるのが我が大学の研修旅行だと思います。先生方が考えて、準備して下さったプランだからこそ実現したことが盛りだくさんです。こんな機会をみすみす逃すことはない。

私の初めての海外旅行の感想は「日本はいいね」です。この二言に尽きます。だからといって、海外に行かなかつたほうが良かったというわけではありません。行つたことにより、得たものが多かつたからです。

「就職してお金がたまつてから」なんて思っている人は間違っています。お金は無いかもしれませんが、時間は今しかないと思います。お金は借りることができますが、時間を借りることはできません。

情報システム学科だからといってアメリカへの参加に限ることはありません。折角のチャンスを無駄にしないでください。行きたい国に行けばいいのです。行くなら、今。今しかない！

## マスコミ

## 記事から

## 中国語劇、ロシア語劇の紹介

十月二十五日の新潟日報は、紅翔祭のメイン

イベントである中国語劇、ロシア語劇を取り上げ、「県内大学では初めての企画」とカラー写真入りで大きく報道した。



## 新製品調査

十月二十日の日本経済新聞は、宗澤、正田両先生が最近発表された「新潟県内製造業の新製品開発実態調査」を紹介した。この調査は本大学の共同研究助成を得て実施したもので、県内の企業についての調査としては最初のもの。尚、この調査は十月二十五日の新潟日報第二面でも紹介された。

## 湧 YUUGEN 源

編集後記に代えて

広報委員長 會田 彰

寒空に白鳥の舞う時節、ようやく大学広報第一号の創刊にたどり着きました。このコラム名は「ゆうげん」と読みます。実は私は当初これを本誌の表題にしたいと思いました。しかし、余りにも古色蒼然の印象ですのよしました。第一号ですから、学長、学部長に正面切つて建学の精神を語つて戴きました。格調が高すぎて、若い学生諸君の愛顧に堪えないかも知れません。だが、学長の巻頭言には、歴史を忘れた者は精神の支柱を失つて生きているのだという信念が、教育愛に転じている厳しい鞭撻が秘められています。学部長のお言葉は、文字どおり、未来と世界へ翔び立つ若い世代への期待を込めた学部の説明です。よく読んでほしいと思います。

本学には、インターネットで知られるような先端情報テクノロジーに精通したベテラン・新進の教員が多く参集し、県下随一のメディア環境を構築すべく頑張っています。同時に、機械はデータとプログラムで動くが、人間は希望と期待で動くもの、ということを知悉した人間・社会・文化「学」の大家も同居しています。湧き水が樹木の緑を濃くするように人間の特性は、自分の秘めた可能性を知つて、希望を新たにすることどこまでも伸びるものです。「湧源」佐潟のある赤塚の地に「みずき野ニュータウン」が生まれようとしています。新しい文明は僻遠の地から生ずると言います。ご執筆戴いた学生・教職員の皆様に感謝申し上げます。